雜載

休息の御座所、又は御茶屋にめされて、御質問ありしが、いかにも好文の主にてまし〳〵けるとて、ひそかに感嘆し奉りたり、

〔銀臺遺事下〕若くまし〳〵ける程○細川重賢より、學文を好ませたまひ、常に書籍を遠ざけ給はず、狩に出給ふにも、かならず持行かしむ、日毎に朝の御膳すみては、必書を御覽あり、また月に六度の會菜ありて、近習の人々を召しつどへて讀給ふ、凡會讀は、あらかじめよみてこそ其甲斐ありとて、下讀といふ事一度も怠り給はず、されば御一代に會讀ありける書籍、經史子集數百卷に及べり、其中論語、詩經、書經、左傳、漢書抔をば、くりかへしあまたよみ給ふ、もし會の日さわる事あれば、かならず日を替て、六度の數をみて給へり、又其書の難儀をみな考へ見て、手づから書き加へ給ふ、今も文庫に手澤の殘りける、數えれずありなん、

〔先哲叢談後編七〕小川泰山

泰山自一執謁於北山、雖烈風大雨、未嘗不蹈師家之閾、曾大雪、戴一巨笠、赴之、途未至半、雪積笠重、力不能勝之、顛蹶大傷膝焉、人愍扶之、勸令返家、不肯、遂至師許、忍痛受業、若常、比隣傳爲美談矣、

〔百家琦行傳四〕窪村竹

東武青山熊野横町に、窪の村竹といへる老人在けり、○中略或商人の慫慂になりて、やう〳〵に成長、つひには俚き野菜商人とはなりにけり、幼年より、書を見る事を好のあまり、一日商ひし、いさかの利德をうるときは、且當日の米を買、殘れる錢は私に貯蓄おき、書を求めて是をよむ、竟に一日清かなる衣服を著し事なく、家は破れかたぶきたれども厭ず、○下略

〔菅家文草二〕近日野州安別駕、製一絶、寄諸同志、有頻歷外吏、獨後倫輩之歎、予不勝助憂、聊依本韻、訓、

君曾獻策立公車、政事當求孔子家、請抱貞心能報國、寒松不道遂無花、

〔續古事談一王道后宮〕後三條院ハ、イカ程ノ學生ゾト人ノ問ケレバ、江中納言○匡房オモヒマウケタ